

我孫子武丸『探偵映画』

2012/04/14

最初に断っておきますが以下の文章にはネタバレが含まれています。
未読の方はご注意ください。

1 /はじめに

我孫子武丸さんという方はもうみなさん御存知のことと思います。小説やゲーム、漫画のシナリオやはたまたテレビ番組の問題作成など手広く、彼の活動は広範囲に及んでおります。では、彼は一体何者なのでしょう。みなさんは彼の職業を何と認識しているのでしょうか。小説家？ それともシナリオライター？ もちろん彼の本分は推理小説作家であり、それを起点に様々な活動をしているわけであります。しかし、私はあえて彼をクリエイター創作者と呼びたい。と言うのも、今回私が例会を担当するにあたって課題本とさせていただいた『探偵映画』。この作中で彼は映画をまるまる一本作ったからです。それもただの映画ではない。先人の作品を踏襲し叙述トリックを盛り込んだ、非常に巧みな手法の映画を彼は作り上げたのです。そういう意味では彼は映画監督であるとも言えます。つまり、この作品では彼は二つの役職をこなしているのです。今日はそんな多彩で魅力的な作品を創る我孫子武丸さんを紹介し、『探偵映画』が彼の他作品に触れるきっかけになれば私としても幸いです。

この例会が終わったら是非彼の作品を手にとってみて下さい。新しい世界がそこにはあるはずです。

2 /著作紹介

私の所属しているこのサークルは外でもないミステリ研究会と存じておりますので、著作の掲載は小説のみにさせていただきます。また、彼の作品はあまりにも多岐に亘っているため主な作品をここでは取り上げます。興味があれば他の作品も調べてみて下さい。尚、ここで抜粋した作品は2012年2月1日に新潮文庫から出版された『Mystery Seller』に載っていた著作リストから拝借し、Wikipediaを参考にしつつシリーズごとに整理させていただいたものとなっております。(作品の後のカッコ内は初めて書物として刊行された年月と出版社を表しています)

《速水三兄妹シリーズ》

- ・『8の殺人』(1989年3月/講談社)
- ・『0の殺人』(1989年8月/講談社)
- ・『メビウスの殺人』(1990年2月/講談社)

《人形シリーズ》

- ・『人形はこたつで推理する』（1990年8月／角川書店）
- ・『人形は遠足で推理する』（1991年4月／角川書店）
- ・『人形は眠れない』（1991年9月／角川書店）
- ・『人形はライブハウスで推理する』（2001年8月／講談社）

《ぼくの推理研究シリーズ》

- ・『ぼくの推理研究』（1993年8月／集英社）
- ・『死神になった少年』（1997年4月／集英社）

《腐食の街シリーズ》

- ・『腐食の街』（1995年11月／双葉社）
- ・『死蠟の街』（1999年9月／双葉社）

《京都探偵シリーズ》

- ・『ディプロトドンティア・マクロプス』（1997年7月／講談社）
- ・『狩人は都を駆ける』（2007年12月／文藝春秋）

《その他》

- ・『探偵映画』（1990年12月／講談社）
- ・『殺戮に至る病』（1992年9月／講談社）
- ・『小説たけまる増刊号』（1997年11月／集英社）
- ・『まほろ市の殺人 夏・夏に散る花』（2002年6月／祥伝社）
- ・『弥勒の掌』（2005年4月／文藝春秋）
- ・『警視庁特捜班ドットジェイピー』（2008年6月／光文社）
- ・『さよならのためだけに』（2010年3月／徳間書店）
- ・『眠り姫とバンパイア』（2011年3月／講談社）

他にも前述したようにゲームシナリオや漫画シナリオ、アンソロジー、官能小説など雑多にあります。割愛します。

3 / 作風

前項で我孫子さんの主な作品を一通り見たので、ここで少し作風について触れたいと思います。以下箇条書きになります。悪しからずご了承ください。

- ・読み易いものからシリアスで重い話まで幅広く執筆している
- ・創作に対する姿勢が積極的で、一風変わった（類を見ない）作品が多い
- ・主題と言うほど大仰な事ではないが、自分の思索や意見、読者に伝えたいことを自身の作中に折り込んでいる
- ・恋愛が絡むことが多く、主人公は大抵恋をする or している

- ・ちょっとしたギャグやユーモアがある

4 / 『探偵映画』

それでは我孫子さんの作風を踏まえたうえで課題本の『探偵映画』を見ていきましょう。私がいくつか項目を設けたので、それに関して私のできる範囲でお話していきます。が、その前にみなさんの感想をお聞かせ願えませんか？

《構成》

この作品はあとがきで作者が述べているように、メタミステリの体裁をとっています。メタミステリと言うのは、(狭義の)ミステリについて言及した小説、あるいはミステリのフィクション内フィクション(この場合推理小説の中の推理映画)を指します。私は定義づけは重要だと思いますがそこまで熱心に興心を払っているわけではありませんので、ここでとやかく言うつもりはないです。この場にいる人の中には一言物申したい方もおられるかと思いますが、ひとまずは流していただくと嬉しいです。無識者の戯言とでも思って聞いて下さい。

さて、話を戻しましょう。この作品は未完成の映画『探偵映画』に合理的かつ意外性のある結末(言ってしまうえば映画として面白い結末)を作る話です。プロットも現実世界(立原たちのいる作中世界)と映画のストーリーが部分的に交互となる形式になっております。このためフェアかアンフェアか、読者は本を読み進めなければ問題編を全部見ることができないのです。こうやって小出しにすることで読者はより作品に引きつけられ(この時点で既にミスリードが始まっている)、それが我孫子さんの狙いでもあると考えています。

また、多重解決+映画の類例として米澤穂信さんの『愚者のエンドロール』という作品がありますが、あれは未完成部分を全て最初に見せて主人公たちがいろいろな人の推理を聞く(審判する)という点では『探偵映画』と多少異なります。興味のある方、未読の方は是非読んでみて下さい。『探偵映画』を読んでもからでもそうですし、たとえ読んでいなくとも作品自体充分楽しめると思います。

《役名》

役名が登場人物の役者たちと名前が似通っておりこれからの解説に支障をきたす虞がある故、作中にも載っていた配役をまとめておきます。

例) 職業(続柄) 役名・・・役者

フリーライター	辰巳洋太郎	蓮見光太郎
医師	細野拓二	細川拓也
付添い看護婦	林美枝	森美樹
雇人	藪井仙三	藪内善造
鷺沼潤子の娘	鷺沼五十鈴	清原みすず
鷺沼潤子の甥	西山貴雄	西田貴弘

《伏線とミスリード》

推理小説は二度読みが基本。全てを知った上で再度読み返し、伏線を拾ったり犯人の動きを追ったりするのが醍醐味。そんなわけでここでは伏線とミスリードに焦点を当てていきたいと思います。

- ・伏線

- ・ミスリード

《公平さの問題》

フェアかアンフェアか。ここはみなさんの意見も交えて話していきたいです。まず私の立ち位置をはっきり申し上げておきましょう。私はアンフェアだと思います。理由は後ほど。

とりあえず多数決をとるのでどちらかに挙手を願います。()には人数を記入して下さい。

- ・フェア ()

- ・アンフェア ()

《多重解決》

『探偵映画』の白眉であるその圧巻な叙述トリックもさることながら、多重解決も面白味の一つであります。アントニイ・バークリーの『毒入りチョコレート事件』みたく、ここでは大柳監督の考えた解決編を含めた計七つの解決編が提示されています。その内、出演者の考案した解決編は随分荒唐無稽なものとなっていますが、そこがまた面白い。犯人役が一番目立つために、役者さんたちが揃いに揃って自らを“殺人犯”に立候補し、また自らの推理で自身を“殺人犯”に仕立て上げる。その滑稽さや人間の欲に忠実な醜い部分をコミカルに描く様は実に我孫子さんらしく、こういう所が私が我孫子さんの作品が好きな所以です。

また多重解決の美点は、解答はあっても正解はないということです。分かり易く言えば答えは複数あってそれが論理的で筋が通っていればそれも一つの答えであると私は思います。まあ今回の場合、重要視されたのは意外性であり映画として見た時に面白いか面白くないかに重きが置かれたわけですが、別にサードの立原の解答でもいいわけです。それこそ極端な話ではありますが、西田の風船を使ったあの解答でも構わないのです。ただそこにはプロバビリティという問題があり……これ以上は自分の首を絞めることになりそうなので止めておきます。そういうことは会長とか、もっと位の高い偉い人に聞いてみて下さい。とにかく私が言いたいのは、多重解決において真実はいつも一つとは限らないことです。当たり前のことを言っているように思うかもしれませんが、案外意見が分かれるのではないのでしょうか。

ここでもしこの一週間私が渴望していた時間が余るようであれば、ここに出てくる多重解決の一つでも例に挙げて犯人、手段、動機、穴について仔細に検分したいところでもあります。

《この作品を書いた意図》

作風の方で少しお話し申し上げましたが、我孫子さんは自身の作品に必ず何らかの意図を組み込み、読者に伝えたいことが必ず隠されています。そりゃそうだろう、他の作家先生もそうだよ、という反論の声も上がるのは重々承知ですが、殊更我孫子さんの場合はそれが顕著のように思われます。作品に対するアプローチの仕方（これも作風の方で言及）がいささか他の方とは違うからです。なので、我孫子さんの作品に触れる時には、そこに何らかの想いが含まれていると考えても構いません。というか考えて下さい。そうすることで、ぐっと面白味が増し見方も変わって視界が拓けてくるでしょう。ただしこれはあくまでも一個人としての見解であることを承知願いたい。

さて本題の方に移りたいのだが、これは言わずもがな。ここで我孫子さんが言いたいこと、私たちに投げかけたことは「映画でも叙述トリックは可能」ということです。序盤の映画の蘊蓄で『マッドマックス2』、『サン・ロレンツォの夜』など実際の映画を挙げて問題提起し、そしてラストの『探偵映画』で見事に証明。そのさらりとした鮮やかさには脱帽し、素直に賞賛を贈りたいです。

余談ですが、冒頭などで大柳監督が奔走する撮影スタッフやキャストを思い描いてにやにやする姿が、私たちがラストで驚く様子を想像して作者がにやに

やしている姿に見えたのは私だけでしょうか。

《おまけ》

みなさんの気に入っている^{シーン}場面をどんどん言っていきましょう。ちなみに私のお気に入りには立原が美奈子さんと映画に行ったその帰り道での会話。「恋人は……映画よ」のところですね。立原が南果歩のことを考えながら寝ると言ったことに対し美奈子さんが何だかそれってエッチじゃないと言うその一連の会話がね、純粋に素敵だなと。プラトニックなのかそうじゃないのか。こういう言葉が出てくる女性は素敵だなあと、そうは思いませんか男性陣諸君。何言ってるんだコイツと思うかもしれませんが大丈夫。自分でも何言っているのか分からないです（笑） なんとなくシンパシーを感じてくれればそれでいいです。それ以上の事は求めません。

5 / まとめ

我孫子さんの作品は読み易く、平坦であっさりしているがゆめ侮るな。作品一つとっても斯くの如く掘り下げる余地あり。眼光紙背に徹してこそ真のミス研生。作品に隠された意図を読み取って、初めてその作品の神髄を識ることであろう。な忘れそ。

とまあむつかしい話は差し当たっては脇に追い遣って、我孫子さんの作品には是非触れてみて下さい。純粋にストーリーを楽しんでいただくのも結構。我孫子さんの考えを汲み取れば最高。その中でやはり何か感じるものがあれば必ず自分にとってもプラスになると思います。うまくまとめられたかは正直微妙ですけども、以上をもってまとめとさせていただきます。

6 / おわりに

長い間（もしかしたら短いかも！？）私の例会にお付き合いいただき誠にありがとうございました。どうでしたかね。有意義な時間になりましたかね。私の拙い説明と乏しい知識をもってしてどれだけ我孫子武丸さんの魅力を伝えられたのかは私の与り知らぬところではありますが、先にも言ったように我孫子さんのこの作品を読んでみようと、そういう機会（機械）になったら私の本懐は遂げられたことでしょう。

つまらなかった方、本当に申し訳ありません。完全に私の力量の不足と準備の怠りが招いた結果です。反面教師にするなりなんなりしてください。ただ後学のため、後でこっそりと柔らかかに改善点をご指摘いただければありがたく存じます。

最後までしまりがなかったかもしれませんが、例会は以上になります。みなさんお疲れ様でした！